
憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

こっこ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

【コード】

N6982D

【作者名】

じっじ

【あらすじ】

街角で、その少女は泣いていた……。出会った少年は、夢への入り口か。ルーフェイアとイマド、2人の出会いの物語 「戦いの果てに」の4年前、シリーズの冒頭になります。前作に比べると穏やかです 元7桁サイト掲載、シリーズの改訂版第2弾です 携帯版は、1行毎に改行のレイアウトです

Episode : 01 街角

かのシエラ学院の危機より遡ること四年。
アヴァン領内にある国境の町、ルアノンにて……。

Imad

「四ヶ月ぶり……か？」

昼過ぎのキツイ日差しを手のひらで遮りながら、俺はつぶやいた。

ここはアヴァンとロステイオとの境にある、国境の町だ。長距離線のアヴァン駅から南、バルディオン渓谷の近くにある。

そこへ俺、学院の夏季休暇を利用して遊びに来たところだった。

俺の両親とうの昔に両方死んでるけど、この町には親父の弟
ようは俺の叔父 がいる。この叔父さん息子がいないせいか、俺
のことを可愛がってくれた。

2

「さて、どうすっかな？」

まっすぐ叔父さんの家へ行ってもいいけど、「夕方に着く」って
連絡しちまったから、あんまり早いと悪いだろう。

だいいちあの家は開業医だから、真っ昼間に行っても邪魔なだけ
だ。

ホントのこと言うと、時刻表見間違えてただけだったりするけ
ど。

どっちにしても時間は余りまくってた。

駅のホーム どゆわけか町外れにある で、少し考え込む。

「……歩いてくか」

ここから叔父さんの家まではけっこうあるけど、まあ歩けねえ距

離じゃない。どうせ時間はあんだから、たまにはいいだろう。
荷物を持ちなおして、俺は歩き出した。

街並みはほとんど変わってなかった。ただ前はまだ冬っぽい時期
だったから、人の服装や華やかさがまったく違う。

個人的にはこのほうがいいんだよな。寒いのが苦手だし。

俺、この町好きだ。

首都のアヴァンシティを思わせる、重厚で華やかな石造りの町。
いちおう交通の要所に近いし、周囲の自然を観光に来る人も多いか
ら、辺境の割には人の出入りも多い。

けど俺がこの町を好きなのは、そういう理由じゃない。何度も戦
火に巻き込まれてるのに、そのたんびに昔の姿で復興を続けてきて
るってとこだ。

だからなんだろうけど、この町見ると、人間ってなんでも出来
そうな気がしてくる。

どつちにしてもけっこう来てる町だ。慣れた道をときどき店先の
ぞきながら、ぶらぶら歩いてく。

ネミのやつになんか、お土産でも持ってくかな？

でもあいつそろそろ四つになるから、前みたいに適当なもの買っ
てつても言ばねえかも。

そんなことを考えながら歩いて俺、思わず立ち止まった。
通りの向こうに、ひとり女子がいるんだけど……。

なんか、むちゃくちゃかわいい。

思わず口笛でも吹きたくなるような、とびっきりの美少女だ。色

白の肌に、きらめく背中までの金髪。瞳は海みたいに透き通った碧。なんでかショートパンツにポロシャツっつー、男子みたいなあつさりしたカツコだけど、それがまた似合ってる。正直これほど「美少女」って言葉がしっくりくるやつ、いままで見たことがなかった。

そしてもひとつ。

色がなかった。

俺から見ると人ってのは、それぞれ独特の色を持ってる。けどこの美少女は、そういった色を一切持ってなかった。

ただどこまでも透明な、風に見える。

って、なんか探してんのか？

少し困った調子で手にしている紙切れを覗き込んでいるところを見ると、迷ったか、どこかへ行きたいか、なんだろう。

つい気になって、俺は立ち止まったままその子を見てた。

この子がメモから顔を上げて辺りを見回すと、長い金髪が動きにあわせてふわりと舞う。

そして少しのあいだ街並みを眺めて、その子がまた下を向いた。

ダイレクトに伝わってくる、感情。

泣いてる？

胸がしめつけられるようで、俺は思わずその子のほつへ歩き出した。

Episode:02

The Girl

困っちゃったな。

家族みんなが手が放せなくて、あたしが預け物の引き取りに来ただけど……店の場所が分からない。

近くまで来てるのは間違いないけど、その先がさっぱり、だった。

この町は古くからあるせいかとても道が入り組んでて、おかげで一本路地を間違えると、ぜんぜん違う方へ出てしまう。

時計を見ると、もうかれこれ三十分くらい迷ってた。

ぜったい、母さんには言えない。こんなこと知られたら、それこそ何を言われるか……。

もう一度メモで番地を確かめて、顔を上げる。目標物から見てもこの周辺、そう思いながらあたりを見まわした。

首都のアヴァンシティに似て、落ち着いた石造りの街並み。

立ち並ぶ建物はさほど高さはないけど、窓辺が色とりどりの花で彩られてとってもきれいだ。

こんな街で、すごしてみたいな。

なんとなくそう思った。

あたしは今まで、ひとつの場所に落ち着いて住んだことがない。

長くても半年、短いと一週間そこら　もっとひどいと、毎日移動しながらだ。

だからいつも、こんな普通の暮らしに憧れてた。

普通に毎日を過ごして、みんなでテーブルを囲んで……それが出

来たら、きつと楽しいだろう。

でもそれがムリなことも、十分わかってた。

一瞬泣きたくなくて唇を噛む。

誰が悪いわけじゃない。だから諦めるしかない。けど、けど……。

その時あたしは視界の隅の、こっちへ来る男子に気がついた。

慌てて涙をぬぐう。

ダーティーブロンドの髪に、琥珀色の瞳。年はあたしと同じくらいか、もう少し年上だろう。ただあたしが普通より小柄なせいもある。って、けっこう身長差がある。

まっすぐこっちを見るのが印象に残った。

畏怖も何もない、ストレートなまなざし。

こんな風に、あたしを見る人がいたんだ。

対等に、あたしを見てくれる人が……。

その彼が目の前まで来て、あたしはまたうつむいた。どうしていいかわからない。

けど、彼が先に声をかけてきてくれた。

「そんなに泣くほど 何困ってたんだ？」

その声なぜか信じられないほど胸に染みて、また涙がこぼれた。

Episode:03

I mad

「そんなに泣くほど 何困ってんだ？」
なるべくキツくならない調子で言ったのに、またこの子が泣き出しちゃった。

「あ、いやその、悪い。だからさ、なんか困ってるみたいだから……」

「ごめんなさい！」

俺が謝ったはずなのに、なんかこいつが謝ってまた泣いちゃうし。ただ、俺以上にこの子のほうが戸惑ってるのが分かった。しょうがねえから少し待って、また声をかけてみる。

「どこ行きたいんだ？」

近づいてみるとこの子は俺より頭ひとつちっこくて、二つか三つ年下って感じだった。

けどそれにしちゃ、妙にしっかりしてるよな？

年齢が下になるほど伝わってくるものは漠然としてることが多いけど、この子の場合は年の割に、筋道だった考え方をしてる。

まあこんなのあくまでも目安だから、アテにはできねえけど……。

「そのメモが行き先か？」

「え？ あ、はい」

そう答えて、この子があっさり俺にメモを差し出した。

前言撤回。

すっかりしてると思ったのは、俺の思い違いってやつだったらしい。困った顔で俺を上目遣いに見上げる様子ときたら、どう見たって迷子になったチビだ。

可愛いけど。

瞳の碧がすげーきれいだし。

「多分……この近くだと、思っんですけど……」

「えーと、ちよつと待てよ　って、何語だ、これ？」

俺、普通に使われてる言葉なら、ほとんど読めるんだけどな……？
けどここに書かれてる言葉ときたら、アヴァン語どころかロデステイオ語でもねえし、ワサール語とも違う。

で、俺が悩んでたら、この子がまた泣きそうになりながら説明した。

「ご、ごめんなさい！

あの、ここに書いてある……バディエンの店っていう、改造屋さんなんです」

「あ、なんだ。その店が」

相変わらず字は読めねえけど、その店なら知ってる。この町じゃ腕がいいので有名な改造屋で、しかも店主は叔父さんの友達だから、知らないわけがない。

もっともこの店、初めて行こうとした人間が必ず迷うのでも有名だった。

「あそこ、分かりづらいからな。

えーとここからだ、まずこの通りをこのまま向こうへ行っ

…」

「え？ それじゃここから……離れちゃうんじゃない？」「
「入り口がこの辺にないんだよ。んであそこの十字路を右へ曲がっ
て三つ目の右手の路地に入って、今度は四つめで左、それから二つ
めを右へ行ってすぐもう一回右で……」
「え？ え？」

案の定、こいつも混乱した。
気持ちはわかる。

俺だってこの街を知らなかったら、この説明じゃ絶対わかんねえ
だろう。けどマジであそこ、これ以外に説明のしようがない。

憧憬 ルーフェア・シリーズ02

泣いてる美少女最強……

Episode:03 (後書き)

Episode:04

「えっと、十字路は右で、次も右で……二つ目？」
「三つ目」

ついでに言うとおそく、「地図を見て」「ってのも役に立たない。なんか裏路地やら行き止まりやらで、地図と実際とがどうも合っていない。なかつたりする。」

「ごめんなさい、ちょっと何かに書かないと……」
「一緒に行つてやるうか？」

初対面の相手に差し出がましい気はしたけど、一応訊いてみる。そしたら意外にも、この子がぱつと顔を上げた。

「あの、本当にいいんですか?!」

「ああ、かまわねえよ」

どうせ時間、余りまくってるし。

「ありがとうございます」

しかも、エラく素直にお礼言うし。

普通これだけカワイイともう少しお高くとまりそんなもんだけど、この子はそういうものの持ち合わせは、なかった。

「いって。俺もどうせ、時間あるからさ」

並んで歩き出す。

それにしても近くで見ると、その美少女ぶりがさらに際立つ。

陽の光がきらめく、黄金色の髪。

吸い込まれそうに澄んだ色合いの、碧い瞳。

顔立ちの方も、これをつかまえて美少女といわないほうがおかしい。

これに加えてこの濁りのない色だ。

天は二物を与えず、つつーけどさ。

あれぜったいウソで、神様とやらはえこひいきしまくりだろう。

けど俺、そのうちとんでもないことに気づいた。

ちよつと見じゃ分かんねえけど、こいつのベルトやブーツ、いろんなモンが仕込んである。しかも全部戦うための道具ときてる。

身のこなしも、明らかに何かの格闘技を使うヤツの動きだった。

見かけで判断して手なんか出した日にゃ、間違いなく返り討ちだろう。

でもどうみたってこいつ、俺より年下かせいぜい同じくらい

つまり十歳かそれ以下だ。それなのにこんな技術を身に付けているなんざ、マトモな話じゃなかった。

うちの生徒、じゃねえよな？

俺と同じでM e sの生徒つつーのがいちばんありそうだけど、う

ちの学院にゃこんな子いねえし。

だいいちこんだけの美少女が在学してりゃ、絶対噂になってる。

「あの……」

呼びかけられて、はっと我に返った。

「次はどっちへ行けば……？」

「あ、悪い。ここは右だよ」

そう言って、先に立って角を曲がる。彼女がすぐ後からついてきた。

だけど足音がしない。当然気配もない。

どうなってんだよ？

すごく気になる。

けっきょく俺、ためらったけど尋ねてみた。

「おまえさ……どっかM e Sの生徒？」

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

Episode:04 (後書き)

Episode:05

この年でこんな技術を身につけているなんて、やっぱそれ以外に考えつかない。

けどこいつ、不思議そうな顔をした。どうも俺の質問が意外だったらしい。

「学院？ 違いますけど……でも、どうしてですか？」

「いや、あっちこつちに凄いもの仕込んでっからさ……」

とたんに瞳が険しくなりやがった。

けっこう迫力がある。

「これが、分かるなんて」

「そんな顔すんなよ」

なんか思わず慌てながら、ともかく俺は説明した。

「俺、シエラ学院の生徒だからさ。

んであの学校、そのくらい分かんなかったら、やってけないんだ

よ

「シエラ学院……いちばん古いMeS、私設の傭兵学校？」

彼女は学院のことは良く知らないらしかった。まるでパンフレットでも読み上げてるみたいな言い方だ。

けどそれで、一応は納得したっぽかった。

「じゃあ……わかっちゃいますね」

少しほっとしたような表情をみせる。

「でも、あの、このこと……誰にも言わないで、もらえますか？」

「言わない、約束する」

こんな美少女に頼まれて、約束を破れる男いるのか？
少なくとも俺にゃ、出来そうにない。

「すみません、ありがとうございます」

俺の約束に、少女が笑顔になった。大輪の花が咲き誇る感じた。
そして、あ、と小さく声をあげる。

「あの店？」

『改造屋・バディエンの店』と書いてある小さな看板を、目ざとく見つけたらしい。

たたたと走って、扉に手をかける。

ってあの子、やたら素早いぞ？

俺も慌てて後を追っかけた。

「あの、すみません……」

「おっさん、お客だよ」

俺たち二人、店の奥に声をかける。出てきたおっさんは遅しい体つきで、改造屋ってより鍛冶屋って風貌だ。

「なんだ、イマドか。お、今日はずいぶんかわいい連れがいるんだな？」

「おっさんがヘンなとこに店構えてるから、わかんなくて捜してたんだよ。だから案内してきたんだ」

このおっさん、なにかと絡む。

彼女の方は、俺らのやりとりを不思議そうに見てた。けど途中で「そつだ」って小さく言っつて、おっさんの方に向き直る。

「あの、兄がお願いしてたの……出てますか？ 太刀、なんですけど」

「ん？ ああ、出来てるよ。えーと……」
おっさんがごそごそ、その辺を探す。

「ああ、これだろ？」

出てきたのは小太刀なんかじゃなくて、ホントにまともな太刀だった。

それをこいつ、受け取ってすらりと鞘を外す。

刃の重さなんて感じさせない動作。

そして一瞬、彼女の顔に嬉しそうな、なのに凄みのある微笑みが浮かんだ。

Episode:06

The Girl

声をかけてきてくれたその人は、とても親切だった。

お店のことを知ってたし、この町にも詳しいみたいで、案内役まで買っ出てくれたのだ。

途中で素性を見抜かれかけたのには、慌てたけど。

けど黙っててくれるって言うし、「世間」っていい人が多いんだと実感した。

ともかく彼の案内で、無事店までたどり着く。

「あの、すみません……」

「おっさん、お客だよ」

奥へ声をかけると、熊みたいな男の人が出てきた。普通改造屋って言うつと器用そうな人が多いから、これは珍しいかもしれない。

「なんだ、イマドか。お、今日はずいぶんかわいい連れがいるんだな？」

「おっさんがヘンなとこに店構えてるから、わかんなくて捜してたんだよ。だから案内してきたんだ」

どうやらこの彼、ここの店主と知り合いだったらしい。どうりで店の場所を知ってるわけだ。

けど「可愛い連れ」って……？

別にあたしたち、イヌとか連れてないのに。

それに二人だけで、なにか話が弾んでる。

あ、そうだ。

そのうちやつとあたし、自分が何をしに来たのか思い出した。

「兄がお願いしてたの、出来てますか？ 太刀なんですけど」

これを受け取らないことには、帰るに帰れない。

「ん？ ああ、出来てるよ。えーと、これだろ？」

一振りの太刀を出される。

受けとって鞘を外すと、店内の明かりに照らされて刃が光った。

腕がいいというウワサは本当だったらしい。みごとな仕上がりに魔力もよく伝わって、刃との一体感がある。

でもこういうのはやっぱり、試してみないと、と思った。服の試着と同じで、使って初めて分かることは多い。

「あの、試し切りしても……いいですか？」

「え？お嬢ちゃんがかい？」

あたしがそんなこというなんて、思わなかったんだろう。おじさんがとても驚いた顔をする。

でもおじさんに限らず、だいたいの大人の人は、そういう反応だ。

「まあ、裏のガラクタなら構わないが……」

「ありがとうございます」

了解を取った上であたし、店の裏へと回った。

Episode:06 (後書き)

HP作成中・・・今日か明日辺り、出来たらいいな

Episode : 07

Imad

試し切りしてもいいですか、だって？

太刀を抜く動作だけでも驚いてたのに、こいつとんでもないことを言い出しやがった。

まああの身のこなしじゃ無いとは言えねえけど、それにしたってこの太刀、ちよつとやそつとで使いこなせるわけじゃない。

けど当人は「あたりまえ」って感じで、さつさと店の裏へ回っちゃう。しかも不安や迷いは、ぜんぜん伝わってこない。

なんとなく、俺とおっさんも後に続いた。

ワケわかんねえ妙なアイテムやら木切れやらが置いてある裏手で、こいつがぴたりと止まる。

ってちよつと待て、普通そんなもんに狙い定めるか？！

そうはいつでも俺の思いなんて、他人に伝わるわけがない。

一方でこいつのほうは、何の躊躇いもなく太刀を正眼に構える。

外見からは想像できないような、すさまじい気迫。

こいつが太刀に流してる魔力が、見る見るうちに高まってく。

辺りの空気が張り詰める。

ややあって、すうつとこいつが太刀を振りかぶった。

「破っ！」

裂帛の気合と共に刃を振り下ろす。

あれ？ なにも起こんねえ？

少なくともそんな時、俺にはそう見えた。けどこいつは満足げに微笑む。

そして伝わってくる、自信。

「ありがとうございます。いい仕上がりですね」

同時にこいつが狙い定めてた、腰掛け代わりに石が真っ二つに割れた。

「あわわ……！」

おっさんが腰をぬかす。

「マジかよ……」

俺も心底、度肝をぬかれた。

それでも俺、入学してからずっと、かのシエラ学院じゃ学年首席だ。だからまあ、手前ミソをさっぴいてもけっこう出来る部類に入るはずだ。

けどこいつ、そんなのとはケタが違う。

もつとも当人とつちゃ、これは別段変わったことじゃないらしかった。

「あの、これ、代金です。」

それと……どこか珍しいアイテム置いてる店、ご存知……ありませんか？」

何事もなかったって顔してる。

「え？ あ、ああ、アイテムね……？ ゲイルの店ならいいかもしれないが……」

おっさんがようやく身を起こした。

「そのお店……どこですか？」

「そうだなあ、ちょっとややこしいところにあるから……お、そうだ。イマド、お前案内してこい」
「へ、今なんて？」

もの思いにふけてたからおっさんの声、よく耳に入ってた。た。

「なんだ、また聞いてなかったのか」

あきれた調子で、おっさんが同じことを繰り返す。

「つてわけだから、お前が案内するんだ」

「分かったよ。ええと……？」

名前を呼ぼうとして、まだ聞いていなかったことに気づく。

「そういえば、名前も言ってたよな。俺、イマド〓ザニエス。よろしく」

言いながら俺、右手を差し出した。でもこいつ、握らない。

「イマド？ 珍しい名前……ですね。あたしはルーフェイア〓グレイスです。」

それとすみません、あたし右手出す自信がなくて……」

とんでもねえヤツ。

ただ言葉とっしょにすまなそうな感じが来てるから、根は悪いヤツじゃない。

「なんか、すごいんだな。まあいいや、行くっぜ」

「はい」

俺らまた、並んで歩き出した。

Episode : 08 素顔

アイテム屋の方はハズレだった。

ただ店のために言っとくと、別に品揃えが悪かったわけじゃない。ルーフェアが欲しがるものが、レアすぎってやつだ。

いきなり「精霊石が欲しい」とか言われて、店のやつ目を白黒させてたし。

「欲しかったんだけど……」

「欲しいってなあ、んな物、あるわけないだろ」

「そう……なんですか？」

けど、これからどうしよう……」

お世辞にも明るいとは言えねえ店内から出てきて、まぶしそうにしながらルーフェアが言う。

「なんだ、予定ないのかよ？」

「列車の切符……夕方、なんです」

「じゃあ、どつかほか案内してやるうか？」

「ほんとに……」

なんかこいつ、やけに嬉しそうだ。

「あたし、こういうと……あんまり、来なくてはい？」

「いったい、どーゆー生活してんだよ？」

「けど貧乏でこれない、って感じじゃねえし……」。

「ま、いつか。」

とりあえず、街の中心へ向かって歩き出す。

「小つちええ町だし、たいしたもんないけどな」
「いいえ」

なんでも街中歩けるだけでいいらしい。

にしても変わってる、つうのかな？ ちょっと普通じゃ信じられない反応だ。

と、大きな本屋の前でこいつが立ち止まった。

「あの、ここ……入ってもいいですか？」

「ああ」

別に入ってたって、誰も困らない。

俺がうなずくと、ルーフェイアは喜んで店内へ駆け込んだ。しかもすっげえ嬉しそうな感情、振りまいてくし。

それにしだって女子ってふつう、服とかなんか見て回ると思ってたけどな？

どうもこいつ、普通とは違うみたいだ。

ただ当人はいたく満足げで、かなり広い店内をざっと一回りしてる。それからきつと好きなんだろう、歴史関係の棚の前で動かなくなった。

「すごい。ここっていろいろある……あ、もう！」

こいつ小柄だから、高い棚に手が届かないらしい。

「これか？」

代わりに取ってやる。

「すみません。あ、これ詳しい」

やっと見つけた、みたいな調子でばらばら本をめくるけど、レジ

へ持つてく気配はなかった。

「買わねえのか？」

「買いたいですけど……重くなっちゃう。」

でもあとで落ちついたら、買いに来ようかな？」

本の題名を覚えるようになぞりながら、妙なことを言いだす。

けど落ちついたらって……旅行ってワケじゃなさそうだし、引越してきた感じでもないし。

なんとも見当つかない。

「これと……あとこれと……」

「なにメモってんだ？」

「ええ、いろいろ」

結局、こいつ一冊も買わずに出てきた。なんか題名と出版社、それにちよこつと内容をメモっただけだ。

きつと店のやつ、ヤだったらうな。

もつとも本人はソなこと、考えちゃねえけど。

Episode:09

「この地方……けっこう、暑いんですね」
「まあな」

真夏のこの辺は、けっこう日差しがキツイ。しかもまだ昼下がりだからなおさらだ。

けどこいつ、それを気にする様子はなかった。むしろあんまりにも白い肌に、見てるこっちが心配になる。

「どっか入るか？」

「大丈夫、です。」

いいな。こういう街中」

つま先で石畳叩いて、にこにこしてるし。

けど、このままぶらぶらしてるだけってのも、芸がないだろう。

「鐘楼、登ってみるか？」

とりあえず、そう持ちかけてみる。

「あの塔、登れるの！」

ぱつとこいつの顔が輝いた。

「んじゃ行ってみようぜ。こっちだ」

俺が走り出すと、こいつも遅れずについてくる。どういう育ち方をしてるのかはともかく、学院の生徒並みに鍛えこんでるのは間違いないさそうだ。

五分ちよつと走って、町の南にある塔の入り口へ着く。

「高い……」

「この子が真上を見上げながら感心した。
「いちおう、この街の観光名所だからな」

もつとも建てられた由来は、そんな悠長な話じゃない。

なにせアヴァン帝国が衰退してからこの方、なにかにつけて戦火に巻き込まれてたこの街だ。だからこの鐘楼は普段は時間を知らせるけど……物見やぐらも兼ねてた。

イザとなつたらこの上に何人も上がって周りを見渡して、いち早くどっかの軍隊 自国の場合だつてある を見つけようつてやつだ。

そしてヤバそうならどっか安全な場所へ、女子供から避難させる体勢が、この街には出来上がって受け継がれてる。

「じゃあ、今も……使ってるんですか？」

「いつもじゃねえけど、今は使ってるっぽいな。」

まあワサールがロステイオに併合されてからこっち、どうもこの辺キナ臭いしな」

今じゃどの教科書にも載ってる大戦はあっさり終わったけど、そのどさくさにまぎれて力を伸ばしたロステイオ国のせいでも、どうも不穏な空気は絶えない。

「ほら、一番上にちらつと望遠鏡見えるだろ？ あれが四方についてて、この近所見張ってたんだ。」

昔は目がいいやつが、上がってたらしいけどな」

「そう、なんですか……」

説明を聞いたこいつの表情は、なんか意味深だった。妙に厳しい顔して、考え込んでやがる。

「どうかしたのか？」

「え、いえ、なんでも……。」

「上がるんですよね？」

「ああ。ほら、来いよ」

鐘楼の入り口をくぐる。

「お、イマド、帰ってきたのか？」

「ええ、今日」

叔父さんの知り合いの人が、入り口でいちおうチェックの役についてた。

「そっちは誰だ？ ずいぶん可愛い子じゃないか」

「えっと……友達ですけど、ダメですかね？」

適当にごまかす。

俺はもう顔パスだからいいけど、物見に使つてると部外者は入れてもらえないことがある。

「友達 学院の子か？ そんなら構わんさ。」

お嬢ちゃん、こんな遠いとこまでよく来たな。何にもないけど、ゆっくりしてつてくれや」

「はい、ありがとうございます」

そのまま俺ら、螺旋の階段を上がった。

「けっこう……新しい……？」

もうちよつと古くからある建物だと思つてたんだろ。ルーフェイアのヤツが不思議そうにつぶやく。

「何度も戦乱で壊れちゃ、建て直してっからな。」

鐘楼自体はずつとここにあるけど、こいつは七年前に建てられたやつだつてさ」

「七年前……あ」

数字を聞いて、こいつもすぐピンときたらしい。

ロステイオが周りの国へ侵攻し始めたのは大戦が終結したすぐ後からだけど、このアヴァンは間にワサル国が挟まってるせいで侵攻が遅れた。

でもそれもしばらくの話で、地方へ逃れてたワサールのレジスタンスを一掃した後、このアヴァンへの侵攻が本格的になって 国境近くにあるこの町も大規模な攻略の対象にされた。

「まあこの塔が爆破されちまった以外は、案外被害少なかったっていうけどな」

「そうなんですか？」

階段をまだ上りながら、こいつが聞き返す。

「俺もよくは知らねえけど。」

ただ聞いた話じゃ、学院から例の傭兵隊が派遣されて、短時間でロステイオ軍追い出したらしいぜ」

このおかげでアヴァンはどうにか占領を免れて、シエラ学院の傭兵隊はさらに有名になった。

「シエラ学院の傭兵隊って、噂には聞いてましたけど……」

「ま、英才教育してる傭兵学校の、エリート連中だし」

それから俺、なんとなく訊いてみた。

「お前さ、そついや年、幾つなんだ？」

多分俺よりは年下だろうけど、聞いてない。

「えっと……十歳ですけど？」

「はい？」

思わず一瞬固まった。

こんな華奢で、俺より頭一つちっちゃいやつが、十歳？！

マジかよ。

「あの、どうか……？」

「同年だったとはな……」

「ええっ?!」

どういうわけか、こいつまで目を白黒させる。

「そっちこそ、どうしたんだよ?」

「んと、えっと……きつと、年上だって……」

「なるほど」

確かにちっちゃいこいつを基準にしたら、俺は年上に見えるだろう。

「えっと、あの、ごめんなさい……」

「は?」

今度はいきなり謝られて、思いつきり悩む。

「なに謝ってんだ?」

「だって、あたし、年を間違えて……」

「んあの謝んなくていいっての。気にすんなって」

って言うか、大柄なせいかだいたい俺は、年より上に見られる。

「ですけど……」

「だから、いいっての。」

あ、そうそう、いい加減その敬語もヤメな。タメ口でいいから
もともと丁寧なんだろうけど、どうもこそばゆくて俺は嫌いだ。

「あ、はい、わかりました……」

「だから、それ」

「え、あ、ごめんなさい、わかった」

そうこう言ってるうちに、階段が終わる。

鐘楼の上には交代で見張りしてるらしい青年団の人が何人かと、
防災担当のおっさんがいた。

「ども」

下から連絡が行ってたんだろう、俺らを見ても誰も驚かない。

「お、やっと上がってきたか。」

にしても、お前がわざわざ上がってくるなんて珍しいな。やつぱ
そのお嬢ちゃんの案内か？」

「そんなところです」

叔父さんがこの町じゃ有名人なもんだから、たまに来るだけの俺
まで、町のエライさんに顔知られまくってる。

絶対に悪いことはできないってやつだ。

「ほらお嬢ちゃん、そんなとこ突っ立ってないで、こっち来て見て
ごらん」

おっさん。

美少女ぶりに当てられたのか、猫なで声でルーフェイアの面倒み

てやがるし。

「あれ、ちよつと届かないか？」

「そしたらほらこれで……よし、この上へ乗ってごらん」

拳句にその辺に置いてあつた木箱を動かして、踏み台にしてやつてるし。

「見えるかい？」

「はい、大丈夫です」

「そうやってしばらく、町の外に広がる平原を眺めた後だった。

「あ、煙……？」

「煙？」

「妙なことをこいつが言い出す。」

「どっかの改造屋の煙じゃねえのか？」

「んと、そうじゃなくて、火事みたいなの……」

「なにっ！」

緊張が走る。

「お嬢ちゃん、どこだっ！」

「いえ、あの、その町中……」

おっさんたちの剣幕に押されながらも、ルーフェイアが指差した。慌てて見張りの一人が望遠鏡を向ける。

「分かるか？」

「はい、どうにか 南区の十番通りっばいですね。キナ通りと交差する辺りです」

「え？」

耳を疑う。

確か叔父さんとこのいちばん上の姉貴とその娘のネミ、いま住んでるのそこら辺だ。春に来たとき家建て直すってことで、仮住まいへの引越し手伝わされた。

「やべえ、俺ちと行ってきます。姉貴とか家が今そこなんで！」
「ホントか？　だが気をつけるんだぞ」

慌てて身を翻して階段を駆け下りようとした時。

ルーフェアと目が合った。

不安げでうるたえて……。

そうか。

「ここでひとりにされるのが嫌なんだろう。」

「来るか？」

「言ってみると、こいつがうなずいた。」

「んじゃ行くぞ！」

Episode:12

さつき上がってきた階段を二人で駆け下りて、街中を駆け抜ける。にしても、華奢な見かけによらずルーフェイアはタフだ。俺だつて学院で鍛えてるのに、ぜんぜん遅れないでついてくる。そのうち、前のほうに人だけが見えてきた。

つて、マジかよっ！

悪い予感つてのは当たるもんだ。姉貴たちのアパートメント
つてもかなり豪勢　　は火元じゃなかったものの、もう隣の炎が移
つてた。

「晴天続きだったからな……」

誰かのつぶやきが聞こえる。

「すみません、通してもらえますか！」

どうにか人垣をかき分けて家の前まで行くと、その辺の男連中に
姉貴が、取り押さえられてるのが目に入った。

「姉貴、だいじよぶか？」

「イマド！」

声に気がついてこっちへ振り向く。幸いぱつと見、ケガだのヤケ
ドだのはなさそうだ。

ただ、ほっとしたのも束の間だった。

「ネミがっ！　ネミが中につー！！」

「なんだって！」

お土産でも買ってつて　そいや忘れてた　やろうと思つてた
あいつが、まだこの中に取り残されてるって言う。

けど思いのほか火の勢いは強くて、誰もが二の足踏んでる状態だ。
「消防はまだか！」とか、叫び声があがってる。
と、気配もナシにルーフェイアが隣へ来た。

「中に……誰がいる……の？」

「それが、姉貴の子のネミってチビが」

「わかった」

俺の言いかけた言葉が終わらないうちに、こいつがふわりと身を
翻す。

「なっ、ちょ、待てっ！」

止める間があればこそ、あっという間にその姿が、炎が縁取る建
物へ消えた。

「ルーフェイアっ！！」

とっさに あとで、よくんなことをしたと背筋が寒くなった
俺も後を追う。

「バカヤロっ！ 死ぬぞ！！」

「イマドこそ、どうして?! あたしはともかく……死んじゃうじ
ゃない！」

それは俺のセリフだろ、と思う。どこをどうやったら、炎の中で
こいつが平気でいられるってのか。

けど、言い切るだけあってちゃんと理由があった。

「ちょっと待って、いま精霊、移すから」

突然、奇妙な感覚が襲う。

なんなんだよ、これ？

背筋が逆なでられるような、独特の感覚。

「ごめんね、持ってた精霊……どうにか強制憑依、したんだけど」

「あ、それか」

シエラ学院の傭兵隊は、従属精霊を利用した強力な魔法で有名だ。だから俺もいちおう、これについての知識はあった。

「精霊」って呼ばれる存在は、けっこうありきたりだ。ちよつと曰く付きの山だの洞窟だの滝だの、そういうところへ行けばたいていお目にかかれる。早い話そういう「場」で出来上がった、この世界を作るエネルギーの塊だ。

しかも、それぞれに意思があったりする。

なんでエネルギーの塊が出来たうえ意思まで持つのか、これはさすがに分かってなかった。神話の時代の超技術で作られたとか、死んだ人間の魂だとか、異世界から来るとか、いろんな説があるけど真相は藪ン中だ。

ともかく精霊はそういうよく分かんねーモノで、でも捕まえて従えて上手に使うと、自分を強くしたりできる。

にしても。

精霊を使うところなるって聞いていたけど、どうにもヘンな感じだ。

ただ、焼けつくような熱さは消えてた。

「炎と煙、だいじょうぶにしてあるから。」

「いけない、早くしないと」

なんかいまいちピンとこないけど、炎やら煙やらでやられるってことはないらしい。

「えっと……二階？」

「いや、三階だ。姉貴んち、今そこだから」

こいつと二人、炎が舐める階段を駆け上がる。幸い石造りの階段は、まだしっかりしてた。

「ネミ、いるのかっ！」

「待って、なにか……」

どうもこいつ、耳も鋭いらしい。

「この先……泣き声？」

廊下の向こう、固く閉ざされた扉を指差す。

「間違いない、姉貴たちの部屋だ。行くぞ！」

「だめよっ、開けたら！」

バツクドラフトでいつきに部屋が燃え上がったっやう！」

「じゃあどうするんだよ！」

答えはなかった。代わりにルーフェイアのやつが、何か呪を唱えだす。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ　フロステイ・エンブランスっ！」

瞬間、冷氣系最上級呪文が炸裂した。

通ってきた後ろに氷の壁が出来たうえ、周りの炎も弱まって消え

る。

魔法って、こーゆー使い方もあんのか。

感心しながら、俺はドアのノブに手をかけた。こっちももう冷えてる。

それから慌てた。

「早くっ！ 今なら開けられる！」

こいつが急かすけど。

「分かってるけど、開かねえんだよ！」

炎にやられたのか、今ので凍りついたのか。ともかくドアはびくともしない。

「どいてっ！」

しびれを切らしたルーフェイアが、俺を押しつけた。

「ネミちゃん、ドアから離れてっ！！！」

一言警告してこいつ、目にも止まらない速さで蹴りを叩き込む。

轟音とともに、一撃でドアが砕け飛んだ。

信じらんねえ。

どこをどうやったら、あの細っこい脚でんな離れ業ができるんだか……。

「ネミちゃん！」

もっともこいつにやこれは当たり前らしくて、そのまま真っすぐ部屋へ飛び込んでる。

「おねえちゃん、だれ……？」

「え、えっと……その、助けに、来たんだけど……」

そこで詰まるな。

あんだけ勢いよく魔法放ってドアを蹴り砕いたつてのに、ネミの質問にしどろもどろだ。

「ネミっ、逃げっぞ！」

「おにいちゃん？」

一瞬俺のこと忘れてたらどうしようかと思ったけど、それはなかったらしい。

「おにいちゃん、あつかったよお……」

燃え始めたのと反対側の部屋にいたのがよかつたんだらう、ネミはケガした様子もなかった。

「もう、だいじょぶだ」

すがりついてきたチビを、とりあえず抱きしめる。

けどルーフェアのほうは、感動の再会になんざかまっちゃなかった。

「早く、ここから出ないと。火が消えたわけじゃ、ないから」

「そだな」

まさか通ってきたほうへ行くわけにもいかないから、手近な窓へ近寄る。幸いこっち側は、向こうほどには火は強くなかった。

でも窓を割って炎が押し寄せるのは、時間の問題だらう。

「こっからロープでも使えば、どうにか……」

「それじゃ、逃げ遅れちゃう。このままネミちゃん抱いて、飛び降りて」

「む、ムチャ言うなって！」

俺ひとりだつて三階なんてヤバいのに、抱いてたネミを落つことしたら笑い話じゃ済まない。

でもルーフェイアのやつは譲らなかつた。

「絶対、大丈夫だから。信じて」

言いながらこいつ、水系の魔法で毛布を濡らして、ネミのやつを包む。

「冷たいけど、我慢してね。」

「ねえ、お願い」

「わかつた」

こいつのまつすくな碧い瞳に、信じる気になる。

それに炎の中から出るには、こつやったネミを抱いて飛び降りるのが、いちばん早くて確実だろう。

「クマさんもあ！」

さすが姉貴の娘。マイペース過ぎる。

「これか？」

さつきまで持ってたんだろう、床に放り出されてたぬいぐるみを拾って持たせて、俺はネミを抱きなおした。

窓を開けた瞬間、熱風が吹き込む。

「頼むぜ！」
「うん」

ネミのやつを頭まで包んで、ぎゅちり抱いて飛び降りる。
近づく地面。

「セレスティアル・レイメントっ！」
聞いたことのねえ呪文をルーフェイアが唱えて、落下が一瞬止まる。

それからごく軽く、地面へ足が着いた。
次いで今度はルーフェイアが飛び降りてくる。

「大丈夫だった？」

「ああ。」

つと、このチビ、姉貴に返さねえと
とたんにこいつの顔が曇る。

「あたし……ちょっと違うとこ、行っていい？」

「へ？ なんでだ？」

「だってその……目立ちすぎちゃったから……」

そりゃそうだ。

ただでさえ人目引くヤツなのに、こんなことすりゃ目立つどころの話じゃない。

ともかくなんかこの辺ワケありらしくて、しかも路地の向こうから人の声が聞こえてきているから、もう気もそぞろって風だ。

「そしたらそうだな、そこ左に曲がって真っ直ぐ行くと、ガッコの隣に公園あるんだ。」

そこだったらほとぼり冷めるまでいても、目立たないと思つぜ」「
「ありがとう」

言つてルーフェイアが駆け出して、立ち止まる。

「どした？」

「うん、えっと……あとでそこへ、来てもらつて……いい？」

「へ？」

いきなり何を誘つ、と思つたら違つた。

「だって、その、精霊……」

「なら、今取つてけよ」

「え、でも、強制でつけたのに、いきなり取つたら……」
そついうことらしい。

「分かつた。んじゃこいつ返したらちゃんに行くから、待ってるな？」

「うん、ありがとう」

今度こそルーフェイアの姿は、路地を曲がつて消えた。

「おねえちゃん、いつちやつた？」

「ああ。」

さて、ネミ、ママんと行くか？」

「うん！」

どこまで状況がわかつてんのかわかんねえこいつを抱いたまま、ぐるっと遠回りして表通りへ戻る。

「姉貴！」

「イマド、あなた無事で　ネミっ!」
後はもう、言うことナシのご対面だ。

「ネミ、良かった……。イマド、ほんとにありがとう」
「いいけどさ、姉貴、今度っからネミひとりで置いてくくなよ?」
「ええ、もう、絶対」

まあ、怖くて二度と出来ねえだろうけど。
それから姉貴が、思い出した顔になる。

「イマド、あの子は？　無事なの?」

「あの子?」

あ、あいつか」

きつちりルーフェアのこと、覚えてたらしい。
かといって、細かいこと訊かれちゃ困るし……。

「無事だけど、なんか目立ちたくないって言ってさ。
だから、こっそり逃げて隠れてる」

「あらまあ。困ったわ……」
お礼するつもりだったんだろう、姉貴が考え込んだ。

「どこへ行ったか、分かるの?」

「分かるけど、来ないと思うぜ。そゆの、キライらしいし」

「あら……」

どうにか落ち着いてきたみたいで、姉貴お得意の妙なのんびりペ

「スガ復活のきざしだ。」

「これ、苦手なんだよな。」

この姉貴のスローペースに巻き込まれると、なんか抜けらんなくなる。ついでに言うと叔父さんちの姉貴三人は妙に個性的で、いつも振り回されるのがオチだった。

つか姉貴、マイペースはいいけど、家が焼けてるの忘れてねえか……？

「そ、それより姉貴、ネミ病院連れてけよ。見た目だいじょぶそうだけど、ほら、一応さ。」

それに出てくつとき、こいつ濡らした毛布で包んじまったから、このままだと風邪ひくかもしんねえだろ？」

なんとか別の方向へ話題を持つてく。

状況が状況だから、姉貴もすぐ乗った。

「そうね、そうよね、そうするわ」

「それがいいって。」

ほら、ちよつど救急車来てるし」

姉貴とネミをそつちへ押しやって、救急隊にワケを話す。もちろん即刻乗せてくれて、まっすぐ病院行きだ。

「イマド、あの子によるしくね？」

「はいはい」

ネミが元気だから、姉貴も救急隊もなんかのんびりだ。

「きゅっきゅっしゅー」

当人、すげーはしゃいでるし。

消防も到着して、その辺りが池になりそうな勢いで放水してるから、もうだいじょぶだろう。

ともかく二人を見送って、やっと俺の身体が空いた。

早くしねえと。

途中で迷子ってこたねえだろうけど、ルーフェイアのやつをひりで待たせとくのは、なんか怖い気がする。
で、そっちへ駆け出そうとしたとき。

「イマド！」

呼ばれて振り向くと、今度は叔父さんと姉貴のダンナだった。

「アーネストとネミはどうしたっ?！」

仮住まいとはいえ家焼けてるうえに、姉貴とチビの姿が見えないもんだから、半分パニックってる。

「無事だよ」

「どこにいるっ?！」

「どっかの病院」

「どっかって、どこだっ?！」

「いや、俺もそれは……」

「んなの、救急隊しか知らねえだろうし。」

「すぐ探しに行くぞ! ほら、来い!」

「ちよ、ちよいタンマタンマ」

強引に腕掴まれかけて、慌てて逃げる。

「こらっ、どこへ行く!」

「用事あるんだって! ああもう、細かいことは姉貴に訊いてくれよな!」

これ以上とっ捕まらないうちにと、俺は慌てて駆け出した。

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

Episode:15 (後書き)

お姉さん、マイペースすぎ。

Episode:16 約束

R u f e i r

炎の中からどうにか女の子を助け出した後、あたしは教えてもらった公園へ向かった。

確か、左へ曲がって真っ直ぐって。

思い出しながら、道路を歩いていく。

遠い空。

優しい風。

強い日差しも夏を思わせて、すてきだ。

道を行き交う人たちもなんだか、みんな楽しそうだった。

いいな、こういふの……。

公園までは、意外なくらいすぐだった。改造屋さんを探してあれだけ迷ったことを思うと、なんだか信じられない。

中へ入ってみると、まぶしいくらいの緑が生い茂っていた。それにとっても静かで、大通りの賑やかさが嘘みたいだ。

木々の間からの木漏れ日。

さらさらと流れぬける風。

石を並べて作られた、小さな水路のせせらぎ……。覗きこんでみると、ちゃんとお魚まで泳いでいた。

誘われるようにしてブーツを脱いで、足を入れてみる。

気持ちいいな。

熱くなっていた足が、冷やされていった。

まだちよつと暑いせいか、公園内はそれほど人はいない。きつともう少し遅くなってから、みんな夕涼みにでも来るんだろう。隣には聞いた通り、学校があった。石造りの立派な建物で、威風堂々、という感じだ。

けど、人の気配はなかった。校庭も校舎も静まり返ってる。ちよつと寂しかった。

学校がどんなとこなのか、あたしは知らない。もちろん何度か目にしたことはあるけど、入ったことは一度もなかった。当然だけど、中で何をするのかはもつと分からない。

勉強だって、いうけど。

ただそれを、たくさんの人と一緒にやるんだって言う。

うまく想像できないけど、楽しそうだと思った。

きつと、分からなかったりしたら、みんなに訊いて……。

つい泣いてしまいそうになって、あたしは慌てて唇を噛んだ。こんなところで泣いていたら、周りの人だって呆れるだろう。

なによりあたしには……関係ない話だ。

考えを無理矢理、明日からのことにもっていく。地形、スケジュール、必要な装備、それから連絡手段。

かなうわけのない夢よりずっと、そのほつが大事だから……。

I m a d

叔父さんと姉貴のダンナを振り切つて、俺はどうにか約束の公園まで来た。

まさか、着いてるよな？

まああいつ方向音痴じゃなさそうだし、さっきの場所とちがつて

今度は簡単だから、ちゃんと行き着いてるだろう。

って、あれ？

広い公園の中をざっと見回しても、ベンチにあいつの姿はなかった。

「自分で返せって言ったくせに、どこ行きやがったんだか」
独り言いいながら、その辺をふらふら探す。

もつともどつかの自然公園ってワケじゃねえから、あいつの姿は割とすぐ見つかった。人工のせせらぎの、水源？に近い奥のほうだ。暑かったのか、ブーツ脱いで水に足突っ込んでる。

「悪い、ちよい時間食っちゃまってさ」

「あ、イマド……？」

金髪が振り向く。

なんか、ひどく寂しげな表情だった。

Rufairの部分が短すぎるので、ちよつと足してみました

「どした？」

「あ、ううん、なんでもない……」

「口じゃそう言ってるけど、伝わってくるのは涙だ。」

それでも、こっちまで悲しくなっちまうような。

そのまま俺らは沈黙した。

木の葉がざわめく音と、水の流れる音とが吹きぬける。

そのうち耐えきなくなっただらう、こいつが取ってつけたふうにつぶやいた。

「精霊、回収しなくちゃ……」

「そいや、そだっけな」

話に乗ってやる。

「えーと、どうすりゃいい？」

「えっと……そのまま動かないで、くれる……？」

言いながらこいつが水から上がった。

んでそれから、どこからかタオル出して足拭いて、靴下とブーツ履いて……。

「おい、早くしてくれって」

「ご、ごめん！」

慌てたら今度は、足もつれてやがるし。

「落ち着けて」

「う、うん」

結局、仕切り直してもつかいになった。

「ごめんね、ほんとに今度は……動かないでね」
「分かってるって」

なんでも強制憑依ってのは、合わねえ形のところに無理矢理押し込むようなもんらしい。だから外す時は、引つ張り出す（？）のが大変だって話だった。

こいつがなんかしてるんだろ。ずーっとしてた違和感が強くなる。

マジで気持ち悪いいぞ？

しかもルーフェアのやつもなんだか、苦労してるみてえだった。

「おい、だいじょぶなのか？」

「たぶん……」

「コワイ」と言うし。

「もうちょっと……待って。なんだかすっかり、くつついちゃって……」

「そゆもんなのか？」

岩場に貼っついてる貝みてえな言い方だ。

「あたしもこんなの、初めて……あ、戻ってきそう」

それからまた少し騒いで、ようやく精霊が取れた。妙な感じも同時に収まる。

「ごめんね、その……大丈夫？」

「ぜんぜんなんでもねえぞ？」

答えて、こいつがほっとした表情になった。

「んでよ、それ、精霊か？」

「うん」

ルーフェアの手の上に二つ、水晶の塊みたいなのがある。ひと

つは碧っぽい色で、もひとつは妙にきらきらした感じだ。

「なんか、いっぱい持ってんだな」

「母さんの……借りたの」

「んな簡単に、貸せるもんなのか？」

学院の先輩たちなんざ、ほとんど見せてもくれねえのに。

ルーフェイアのほうは、俺のつぶやきは聞いてなかったらしくった。公園の中をひととおり、眺め渡してる。

そして、言った。

「いいよね。こういう……平和なの」

「あ、ああ……？」

なんか不思議な言葉だった。

誰でも言う。この言葉は。それに実際ここは、どう見たって平和だ。

けどこいつが言うと、この言葉はなぜか重かった。

そしてまた、沈黙。

と、流れる風に押されたみたいに、ふわりとこいつが顔を巡らした。

「学校、誰も……いないね」

「夏休みだからな」

俺が暮らしてる学院はその成り立ちの関係から、孤児を優先的に受け入れてる。だから帰る場所がないやつがかなりの数で、夏休みでもけっこうがやがやしてた。

だけど普通の学校ってやつはこの時期は完全に休みだから、人がいるほうが珍しいだろう。

「何、するのかな……？」

分かりきつたことを、どついうわけかこいつが訊いた。

「勉強だろ？」

「そっか。」

みんな……するのかな？」

ルーフェイアの言うことは、どう考えてもヘンだった。俺だって学院生だから普通といろいろ違ったりするのはあるけど、もうそゆレベルじゃない。

信じられねえ思いで、訊く。

「お前さ、もしかして学校、行ったことねえのか？」

「うん」

予想通りの、いちばんヤな答えだった。

俺は経緯がちよい変わってつから、そゆことはない。けど学院にいるおんなじ孤児連中には、前はガッコも行かずに働いてたり悪さしてたりってヤツが多かった。

「そしたら、俺と一緒に学院来るか？」
「え？」

意味が飲み込めなかったらしくて、ルーフェイアのやつがきよとんとした顔になる。

「いや、だからさ、お前親とかいねえんだろ？」

「ううん、いるけど？」

「は？」

この答えは予想外だった。

「ちよい待てよ。親がいるのにガッコもいかねえで、何してんだ？」

「戦争」

「な……」

文字通り絶句する。

確かにこれなら、こいつがめちやくちや強そうだったりいろんなアイテム持っていたりするのは、説明つくだろう。

けど、んな話があつていいワケない。傭兵学校に住んでる俺だつて、実戦なんざ未経験だ。

そんな俺へルーフェイアのやつは、別段珍しくもねえこと言うてるみたいなの調子で説明する。

「あたしのうち……父さんも母さんも、傭兵で……だからあたしも、ずっと一緒に……」

「なんなんだよ、それ！」

聞いた瞬間、俺は大声出してた。

親と一緒に分かる。けどだからって、こいつまで巻き添え食ういわれはない。

「でも、しょうがないから……」

諦めきつたみたいなのこいつの表情が、よけいカンに触った。

「だからって普通、ンなところガキ連れてくかよ！」

「そうかも、しれないけど……でも、しょうがないの。」

それに父さんも母さんも、あたしと一緒に、いたいみたいだし……

……

「あ……」

それ以上言えなくなる。

俺はルーフェイアとは、反対だった。おふくろは三歳で死んでしまつてるし、五歳になると同時に学院に押し込まれて、親父と過ごした記憶もほとんどない。

そしてある日親父が『亡くなった』って連絡が来て、それで全部終わった。

どっちが、幸せなんだろうな？

やむを得ない理由があつたとはいえ親父から放り出されちまつた俺よりは、ルーフェイアのほうが可愛がられてるだろう。

でもその代償は、「戦場」。これ以上とんでもねえ話は、たぶん世の中ないはずだ。

「どうにか、なんねえのかよ？」

俺の問いに、こいつは静かに首を振る。

そして微笑んだ。

「大丈夫、あたし慣れてるし……勉強もちゃんと、してるし……」
「ま、マジメ、なんだな」

俺なんざ勉強は、逃げられるだけ逃げてるってえのに。

ルーフェイアのほうは俺の答えに不思議そうな顔になって、「勉強がいちばん楽しい」っつー、とんでもないこと言ってる。

「お前さ、少しダチと遊ぶとかなんとか、したほうがいいぞ？」

「ダチ……？」

なんか言葉、通じてねえし。

「んと、友達。いるだろ？」

「うっん……」。

あ、でも、兄さんとか隊員の人とか……ヒマなら相手、してくれるの」

「なんだよそれ」

もう、ガツコどこの話じゃない。

要するにこいつはどっかの軍の中みてえなところで、ダチもなしにただ戦って……。

なんか腹が立った。

こいつから伝わってくるのは、悲しさばっかだ。なのに口と表情じゃ、平気な顔してる。

だからよけい、腹が立った。

「やめろよ」

「え？」

「そんな生活、やめちまえよ！」

自分でも、何で腹が立つかはわからない。けどどうにも許せなかった。

そんな俺を呆然と見るルーフェイアの瞳に、急に涙があふれる。

「ごめん……」

「え？ あ、いや、泣くなよ。そのさ、お前に怒ったわけじゃ、ねえから」

女子に泣かれたことなんかねえから、めちやくちや対処に困る。

けどよっぽどこたえちまったのか、どんだけ慰めてもこいつは泣きやまなかった。

「な、頼む、もう泣くなって」

「ごめんなさい！」

ずーっとこれの繰り返しだ。

結局俺は、泣きやむのを待つしかなかった。

ルーフェイアのやつを見ながら思う。

たぶんこいつは……今の生活が、気にいってるわけじゃないんだろ。でもなんでだか、それをやめようとは思ってない。

不思議だった。

それとも、なんか弱みみてえなのがあって、どうにもならないのか。

「……だいじよぶか？」

少し収まってきたのを見て、訊いてみた。
さつきとちよこつとだけ、違う答えが返ってくる。
「ご、ごめんなさい……うん、だいじょうぶ……」

言いながらルーフェイアのやつが、涙をぬぐいながら顔を上げた。
あんだだけ泣いてさすがにばつが悪いのか、俺のほうは見ないで
時計に目をやる。

「あ、いけない……」
もっかい涙をぬぐって、こいつが立ち上がった。

「どした？」

「時間が……」

「へ？」

間抜けすぎる返事をしちまってから、思い出す。

「そいや、列車がどうか言ってたっけな」

「うん」

ルーフェイアのやつがうなずいた。

「急がないと。」

えっと、駅、どっち……?」

俺が街中引きずり回しちまったから、現在位置がわかんなくなっ
たらしい。

「こっちだ」

この町だったら俺のほうに断然土地カンがあるから、言葉と一緒に
走り出した。

ルーフェイアも走り出す。

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

「どのくらい、かかるの？」

「走って十分ちよいってところだな」

「よかった、近いんだ」

この答えに内心悩む。

近くはねえと思うぞ？

まあ日常的に戦争してちゃ、近い部類に入っちゃうのかもしれないけど……。

なんか複雑な気分になりながら、それでも俺は走った。

駅が見えてくる。列車も停まってて、どうやら間に合ったらしかった。

「よかった……」

「乗るまで気が抜くなって」

目の前で行かれた日にゃ、シャレにもなんねえだろうし。

ルーフェイアのやつがポーチから、長距離線専用の、記録石がはまったカードを出す。最近駅で切符代わりに売るようになったやつで、これがないと乗っても客室へは入れねえから、デッキであっさり車掌に掴まるって寸法だ。

「どこまで行くんだ？」

「国境超えたところで降りて、あとは車……かな？」
「けっこう遠い。」

「ンなところから、日帰りで来たのか？」

「だって、太刀をちゃんと研げる人って、少ないから……」
「そーいやコイツ、元々は太刀を受け取りに来たんだった。けどあの改造屋のオヤジがそんなの出来るなんて、俺は初耳だ。」

「あのオヤジ、ンな隠し芸あったのか」
「え？」

「確か研ぎ師だけじゃ食べてけなくて……改造屋も始めたって、聞いたけど……？」
「へえ」

改造屋のほうもあんだけ腕がいいのに、それが副業だってんなら、そーとうのもんだ。

そのとき、アナウンスが流れた。もうすぐ発車らしい。

「行かないきゃ。」

「ありがと。すごく、楽しかった」

「言っただけで列車のデッキへ上がりかけて 振り向いた。」

「あのね、えつと……」

「どした？」

「歯切れ悪くためらってから、こいつが口を開く。」

「この町から 逃げて」

「は？」

「思いつきり意味が飲み込めなくて、悩んだ。だいいち俺、逃げなきゃヤバくなるような話にや、首突っ込んだことない。」

「けどこいつは、けっこ真剣だった。」

「理由が言えないけど……お願い、ここから早く、離れて」
「あ、ああ……」

ともかくうなずく。
もつともルーフェイアのほうも、それ以上は期待しなかったらしい。

「ごめん、へんなこと……言つて。」

「さよなら」

背を向けたこいつの金髪が、落ちてきた陽を受けて見事なくらいに輝いた。

「あ、あのな」

呼び止める。

「え？」

ルーフェイアのやつがもっかい振り向いて、ふわりと髪が踊った。なんか、どきつとする。

「そ、その、俺さ、シエラ学院の寮にいるんだ。だから気が向いたら……遊びに来てよ」

「ほんとに？」

陽の光以上に、こいつの表情が輝いた。

同時に海の碧の瞳から、また涙がこぼれる。

「そんなふうに使われたの……初めて……」
「当てなんざ、ホントはどこにもねえ約束。けどそれでも、友達つてのを知らないこいつには、嬉しいらしいかっつた。」

「ありがとう。きつと、きつと行くから……」

「ああ、待ってる」

発車を知らせる汽笛が鳴った。

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

Episode : 21

Rufair

国境を超えてすぐ、予定の駅であたしは降りた。
改札口を抜けて、あたりを見回す。
そして、見つけた。

「 兄さん！ 」

急いで走り寄る。

「 お帰り、ルーフェア 」

兄さんはあたしと同じ髪で、瞳だけがちょっと薄い。それと、本当は従兄だ。

でも、そんなこととは関係なしに大好きだった。何でも知ってて、すごく頼りになって……。

「 太刀はどうだった？ 」

「 えっと、これ…… 」

急いで差し出す。

「 すごくよく……出来てるの…… 」

「 さて、本当かな 」

「 え…… 」

信じてもらえない。

「 でも、試し切りさせてもらって……ちゃんと石、切れたから…… 」

「 刃こぼれするぞ？ 」

「 ご、ごめんなさい！ 」

言われてみれば、あたりまえだ。せっかく研ぎに出したのに……。

「ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

謝っても済まないけど、でもそれしか出来なくて、何度も謝る。そんなあたしの頭を、不意に兄さんが撫でた。

「分かってるよ。お前の腕は、一流だからな」

「……………」
褒めてもらった。

「さ、行くぞ」

「うん」

歩き出した兄さんの後ろを、ついていく。

あたしの面倒を見てくれるのは、いつも兄さんだった。父さんと母さんも一緒にはいるけど、任務に出たりどっかへ行ってしまうたりで、顔を合わせることがちょっと少ない。

なにより、変わってるし。

娘のあたしからみても、両親 特に母さん は常識外れだった。適当な言葉が見つからないけど、あれは絶対に「普通」ってはやわらないだろう。

兄さんが車を置いた場所は、少し距離があるみたいだった。駅前の広場を過ぎて、まだ着く気配がない。

「どこまで……………行くの？」

「どこだろうな」

不安になるようなことを言われる。

「車、だよね……………？」

「そんなこと言っていないぞ」

「え……」

まさかキャンプまで歩くことは、ないはずだけど……。
けど兄さんはそれ以上何にも言ってくれなくて、あたしは困惑したまま、あとをついて行くだけだった。

「ねえ、兄さん、ほんとにどこまで……」

「日程が決まったぞ
はっとする。」

「いつ、なの？」

「五日後だ」

それで十分だった。

これでもう 遊びの時間は終わりだ。

「戻ったら、もう少し細かいことを詰めるからな」

「うん」

日暮れて闇に包まれ始めてるあたりが、また暗くなった気がした。

Episode : 22 再会

I m a d

俺は、暗くなって静まり返ったあの公園に居た。

あれから五日過ぎてる。

ムダに、しちまったな。

あいつが最後に言ったことの意味はずっとわかんねえで、結局俺はこの町に居っぱなしだった。

ようやく理由がわかったのは、昨日。それもニュースになったからだ。

誰も知りやしなかったけど、実はロデステイオ軍、国境のすぐ向こうに展開して奇襲するつもりだったらしい。それを軍に関係あるあいつは知ってて、俺に「逃げる」って勧めたんだろう。

ただ、結果的にはなんにもなかった。奇襲が失敗に終わったからだ。

報道でしか聞いてねえから細かいことはわかんねえけど、どうも徴兵されてた元ワサル人の兵士が裏切って、アヴァン側に密告してくれたらしい。

その話が元になって、このアヴァン公国はすぐシエラ学院に傭兵隊の派遣を依頼、合わせて自前の陸軍（そんなたいした部隊じゃない）も動かして、上手いこと奇襲部隊を奇襲したってコトだった。今はロデステイオ軍の一部の部隊が壊滅、残りはもちよつと奥地の基地目指して敗走してる。

でもそんなことより、俺には気になることがあった。

こないだ会ったあいつは、今どこでどうしてんのか……。

ロステイオ軍の奇襲の話を知って、俺に忠告してくれたくらいだ。たぶん向こうの軍に属してらってやつだろう。

だけど向こうの軍は、敗走してる。壊滅した部隊もある。

「……ルーフェイア、お前バカだよ」

俺に忠告するときながら、自分はその真ただ中だとか、どう考えたってバカの極みだ。

耳を澄ますと静まり返った闇の向こうから、「ごく稀に」「音」が聞けた。だからたぶん、まだ戦闘は終了してない。

その中で、あの俺よりちっちゃいあいつは、戦ってる。それとも、もう……。

「んなわけ、あるかよ」

思わずそう、口に出した。

なにせあいつはあの強さだ。かすり傷だって、そう簡単には負いやしねえだろう。

けど、自分で確かめたわけじゃない。

だから俺に後できるのは、あいつに何もないうちに戦闘が終わることを、祈るくらいだった。

「イマド、ここに居たのか」

あんまりいつまでも帰らねえから心配したんだろう。叔父さんが探しに来た。

「いい知らせだぞ」

「知らせ？」

たぶんこの戦闘関係だろう。ただそれがホントにいいか悪いかは、

わかんねえけど。

叔父さんのほうは俺の口調には気づかなかったらしくて、そのまま話し始めた。

「ロステイオとの間で、停戦協定が結ばれるらしい。お前の先輩たちのおかげだな」

「……………」

答えらんなかった。

俺らの先輩が活躍したのは、はっきりいえばまあ嬉しい。

けど、あいつは？

でも停戦すれば、ここまで無事ならあとはどうにかなるだろう。その時。

(イマド……………)

声が 声じゃねえかもしんねえけど 確かに、聞こえた。

「ルーフェイア？ どこだ？」

「………」

声を頼りに、公園の奥へ走る。

暗がりから、あの金髪が現われた。なんかふらついている感じで、慌てて支えてやる。

って、ちよつと待て！

服をべったり染めてるのは、血だ。

Episode : 23

「お前、ケガしてんのか？」

「うっん……ぜんぶ、返り血……ふふ、やられた……」
こいつが低く嘲う。

たぶん自軍のやつが裏切ったことを、言ってるんだろう。

「なんか、元ワサル人のやつが、密告したんだってな」

「それも……あるんだけど」

また低く、こいつが嘲った。

「他になんか、あるのか？」

「ロステイオの正規軍、あたしたち傭兵隊を見捨てて盾にして……部隊、壊滅したの」

「じゃあ、あの壊滅つてのは、まさか」

「うん。そういう……こと」

俺は、うちの先輩たちがやったことだと思ってた。

けど違う。あれは味方に、見殺しにされたってワケだ。

「考えとくんだった……読みが、甘かった……」

こんなちっちゃいやつが言うとは、思えねえセリフ。

なんか一瞬背筋に冷たいものを感じて、俺は慌てて話題を変えた。

「でもよ、なんでお前、こんなところにいるんだ？」

こっから国境はたいして距離はねえけど、戦闘やってた場所はそのまま向こうの、けっこう離れたトコだ。

まして敗走してんなら、こっちへ来るワケがない。

「たまたまあたし、最前線にいて……前線が、後退してたから……」
疲れてんのか、そこでこいつはいつかい言葉を切った。

「ともかく、下手に撤退するより……こっちへ来た方が、助かると
……思つて。」

それにあたし……小さいから大人みたいに、言われたいし……」

よくわかんねえけど、要するに自分がガキなのを逆手に取つて、
うまく大人の兵士の目を躲しちまったらしい。

で、あとはどさくさ紛れに国境超えて、町へ入つちまっただら
う。

けど確かにこいつが公園あたりで血だらけで倒れてても、敵だな
んて誰も思わねえはずだ。あとは当人がそゆことさえ言わなきゃ、
それで終わる。

すげえヤツ。

内心舌を巻きながら、俺は違うことを言った。

「ともかく叔父さんち行こうぜ？ 医者だからさ、診てもらえるし」

「うん、ありがと……」

まともに歩けそうもねえこいつに、手を貸す。

「だいじょぶか？」

「だい……じょぶ……」

言ってるうちに、こいつの身体から力が抜けた。

「お、おい、しっかりしろよ！」

叔父さん、こっち来てくれ！」

叔父さんは医者だから、こゆ時は頼りになる。

「どうした？ お、こりゃ大変だ」

わけもわかっちゃねえまま、でもばつちり、叔父さんがこいつを
抱え上げた。

「すぐ、うちへ運ぶぞ。」

イマド、その懐中電灯で足元照らしてくれ」

「わかった」

叔父さんと二人、いつもの道を戻る。

「うん、呼吸はしっかりしてるな。ひどい出血もなさそうだし、顔色もそれほど悪くはないし……。」

しかし驚いたな、これは全部他人の血か？」

ルーフェイアのやつ運びながら、しっかり容体チェックしてるし。

「叔父さん、こいつだいじょぶなのか？」

「外傷も見当たらないし、顔色から見て内臓の損傷もなさそうだから、たぶん大丈夫だろう」

「そっか……」

とりあえず、ホツとする。これならたぶんよっぽどじゃなきゃ、ヤバいことにはならねえだろう。それに叔父さんの家はたいして遠くねえから、すぐ手当てもできる。

Episode : 24

町ん中は、通りも含めてほとんど人影はなかった。外出禁止令なんかは出てねえけど、やっぱり状況が状況だから、みんな家にこもってる。

けどこれも、明日辺りには解消だろう。

一階が診療所を兼ねてる家まで戻って、俺は呼び鈴を押した。

「はいはい、今開け あらら」

叔母さんがドアを開けかけて、あんまり驚いてなさそうな顔でびっくりする。このへん、いちばん上の姉貴とそっくりだ。

「可愛いわねえ。

どこで拾ったの？ あたしこんな子、欲しかったのよねえ」

「叔母さん……」

「あら、違った？」

どつと疲れる。

つてか看護師なんだから、見りゃ状況分かるだろに。

ただこの人の場合、ほとんどが本気だからかなり怖かったりする。叔父さんの方は慣れっこだから、まるつきり気にもしねえで、奥の診療室へルーフェイアのやつを寝かせた。

「ふむ。やっぱり眠ってるだけみたいだな。

ところでイマド、この子があの、ルーフェイアって娘なのか？」

「そだよ」

ずいぶん迷いはしたけど、結局俺はあの日火事場であったことを、

叔父さんたちにはぜんぶ話した。だからネミを助けたのがこいつだつてのは、知ってる。
ただ直接見たわけじゃねえから、叔父さんはイマイチ信じられな
いみたいだった。

「そうか、こんな子がなあ……」

「すっげえ強かったけどな」

あいつにして見りゃ炎の中も、そのヘンの通りと大差ない気がするし。

「まあいい、ともかく今は診るのが先だな。お礼ならあとから、ゆ
っくりできるだろう」

叔父さんがその辺から、いろいろ要りそうなモンを出す。

「ほらほら、あなたいつまで居るの？」

「え？」

ぼーっと眺めてつと、叔母さんが妙なことを言い出した。

「だってこいつ、ホントに……」

当人がケガないって言ってたから、たぶん平気だろうけど、やっ
ぱ心配だ。

でも叔母さん、ぜんぜん違う理由だった。

「女の子に興味があるのは分かるけど、やっぱりだめよ？」

「ちっ、ちがつ　！」

「はいはい大丈夫、分かってるわよ」

結局誤解されまくったまま、俺の部屋じゃなくて待合室（なんで
だ？）へ追い出される。

「ちょっと待っててね、すぐ終わるから」

「……………」

なんか言う気力も失せて、俺はその辺のソファに座り込んだ。備え付けの通話石が着信の合図を出したけど、無視する。だいいち遊びに来てるだけの俺が出たって、話がこんがるかるだけだ。

あいつ、何してたんだろな。

戦ってたってのは、だいたい分かる。けどその中で、あいつは何を見てきたのか。

あの時、泣き出しちまったルーフェイア。

ガッコで何するのもかも、友達がどんなものかも知らずに、ただ戦う毎日。

けどそれが、あいつにとっての日常で……。

んなことをぼんやりいろいろ考えてたら、奥から叔父さんが顔を出した。後ろになんか叔母さんも一緒に、診療材料一式抱えてる。

「イマド、すまん、留守番してくれるか？」

「いいけど叔父さん、こんな時間にどこ行くんだよ？」

この暗いのにと思って訊くと、けっこーシビアな答えが返ってきた。

「町の病院へ昨日から負傷兵が運ばれてるんだが、予想より多かつたらしくてな。手が足りないから来てくれと、さっき連絡があったんだ」

あ、あれか。

俺が無視したのが、そうだったらしい。

「悪いが、頼むな」

「ん、わかった」

まあ街中は外出禁止令同然の状態だし、こゆ理由なら誰か来ても、すんなり帰ってもらえるだろう。

「あの子は、できるだけ寝かせておくんだ。

それから私たちは裏手の学校にいるから、何かあったらすぐ連絡しなさい」

「了解」

近いつてものも、なによりだった。あの公園の隣のガッコなら、走ってきやすすぐの距離だ。

「じゃあ、頼んだわねー」

妙にうきうきしたふうな叔母さんの声を残して、二人が出てった。今まで以上に、家の中が静まり返る。

にしても、もういいよな？

このまま待合室にいるってのも癪に障るから、俺は奥の診療室の

ドアを開けた。

ベッドの上に、眠ってるルーフェイアの姿がある。

辛そうだった。

眠ってるはずなのに、それでもまだ心が痛そうだ。

「……バカやろ」

小さくつぶやく。

んなに辛いのに、なんでやめねえんだか……。

と、不意にルーフェイアのヤツが目を覚ました。

「え、あ、その、悪いい。」

えーと、起こしちまったか？」

「うっん……」

言いながらこいつが起き上がりかけて　　がくりと手を付く。

「ムリすんなよ」

「……うん。」

けど、これだけ、やらなきゃ……」

大事な話らしくて、こんだけ身体が参ってるのに、ルーフェイアのヤツはやめようとしなかった。

見かねて訊く。

「何すんだ？」

「あのね……通話石の通信網入れるとこ、ある……？」

「通信網？」

なんでいきなり、と思ってたなら、訊くより早くこいつが説明してくれた。

「連絡、したいの……」

「だったら二階の、叔父さんのが使えるぜ」
隣の診療室にもあることにはあるけど、あれは俺が登録されてねえから使えない。

「ありがと、わかった……」

でもルーフェアのやつ、やつぱり起き上がれないらしい。これじゃ二階の部屋どこか、どうやったって三歩も進めねえだろう。

「明日じゃ、ダメなのか？」

「けど、きつと心配してる、から……」

そりゃそうだ。

行方不明のままってのと、居場所だけでも分かっているのとじゃ、天と地以上の開きがある。

かといってこの調子じゃ、どうやって連れてったもんだか……。少し考えて、俺はこいつにもちかけてみた。

「俺が、やつといてやろうか？」

「……いいの？」

「いいぞ？」

町を十キロランニングしろとか言うわけじゃ、ねえし。

「そしたら……場所、書くから……」

どっからか引つ張り出した紙切れに、ルーフェアのやつが連絡先を書き付ける。

「ここに、おねがい……」

「オツケー。んで、なんて書きゃいい？」

沈黙が降りた。

こいつの碧い瞳から、涙がこぼれる。

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

「えっと、おい、だいじょぶか？」

けど答えはなくて、もうひとつぶ涙が落ちた。
それからやっと、こいつが口を開く。

「ルーフェイア、グレイスは無事、同行した兄さん……じゃない、ラヴェルは死亡。」

そう、おねがい」

それだけ言つて、ルーフェイアのやつが膝に顔をうずめる。

気持ちは、想像ついた。

俺も親父が死んだつて聞かされた時は 目の前で見たわけじゃねえのに こたえたなんてもんじゃ、なかった。

ましてやこいつは兄貴を、たぶん目の前で亡くしてる。

「ルーフェイア、一人のほうが……いいか？」

親兄弟の間にゃ、他人は立ち入れない。学院でも独りにしといてくれてヤツは、けっこういる。

けどこいつは、違うらしかつた。

「ううん、ここにいて……」

辛すぎて、独りじゃダメなんだろう。

その辺の椅子を引っ張つてきて、かける。

でも俺は、何も言わなかった。こんなときにへタになんか言つても、傷つけちゃうだけだ。

死んじまつたやつは、戻らねえから……。

それからどんくらい経つたのか、やっとルーフェイアのやつが顔を上げた。

「なんか……ごめんね」

「気にすんなって。俺もさ、親父死んだときはそうだったし。軍人だから覚悟してたはずだったのに、いざそうなると思えばキーッなんだよな」

答えながら立ち上がって、冷蔵庫を開ける。中には思ったとおり、薬と並んで幾つか缶ジュースが放り込まれてた。

「飲めよ」

放り投げる。

きれいな放物線を描いて缶が飛んで、上手いことルーフェイアの手の中に収まった。

「ありがと……」

夜の診療室に、缶をあける音が響く。

俺も自分のぶんを出して、今度はベッドの脇に腰掛けた。

「これ飲んだら、寝ろよ？」

「……うん」

そのあとはどっちも何にも言わなくて、ただ夜だけが過ぎてった。

翌朝。

「おい、起きられっか？」

俺は時間を見計らって、診療室に声かけてみた。

「ん……？」

あ、うん、大丈夫」

驚いたことに、ルーフェイアのやつが即座に目を覚ます。戦場で育っただってだけあって、抜群に寝起きがいいらしい。

「シャワーでも浴びてこいよ。着替え、叔母さんがタベ出してつたし」

実は朝浴びに行つて、始めて気が付いただけだったりするけど。てか、そこまで用意しといて言い忘れる辺りが、さすがあの叔母さんらしい。

「いいの？」

「いって」

別に、俺が水道代払うわけでもねーし。

「えっと……どこ？」

「こつちな」

二階へこいつを連れてく。なんせここんち一階は診療室だから、生活スペースは全部二階と三階だ。

幸いルーフェイアのヤツは一晚寝たせいか、動けるようになってた。

「その廊下の奥な。終わったら、メシあるぜ」

「ほんとに？」

信じてねえし。

「ウソついてどうすんだよ。てか、先に行ってこいって」
「あ、うん」

こいつを風呂場へ押し込んで、その間に急いでメシの最後の仕上げにかかると。

俺が言ったせいもあるんだろうけど、ルーフェイアのヤツはけっこう長湯だった。

もつともシャワーなんてしばらくぶりだろうから、気が済むまで浴びたい気持ちは分かる。おかげでこっちも、慌ててやらずにすんでいい感じだ。

と、盛大な音が風呂場の方から響いた。

焦って脱衣所へ飛び込む。貧血でも起こしてひっくり返ってたらヤバイ。

「おい、だいじょぶか!」

「だ、だいじょぶ……」

幸い、こいつは何でもなかったらしい。脱衣カゴがひっくり返って、服が散らばってるだけだ。

「ちよつと……滑っちゃって」

「まだ調子悪いんじゃない?」

なんせ夕べの今朝だ。いくら寝たからって、まるつきり元通りになるわけもねえし。

「そう、なのかな……いやあっ!」

「へ?」

タオルが飛んできた。

「やだっ、見ないでっ！」

「ああ」

やっと言ってる意味を理解する。

けどなあ。

もうバスタオル羽織ってたから、裸ってワケじゃない。しかもついでに、そのバスタオルの下が……。

「ネミ並みの幼児体型見せられてもなあ、別にどっつてことね……」

「間髪入れずにカゴがダブルで飛んできて、どっちも俺の頭に豪快に命中した。思いっきり怒らせたらしい。」

「んな怒らな　ちよ、待てっ！」

続けて来た蹴りをどうにかかわす。

「つかお前、タオル一枚で蹴りかますなって！」

丸見えだったの。

「え？　あつ、やあああつ！」

だから自分でやつといて、悲鳴あげんなよ……。

「えーとその、ともかく服、着ろよな？　俺、外にいつから」

「うん……」

しゃがみこんだこいつが、半ベソでうなずく。強烈な蹴りとかシヤレにならねえけど、こーゆーところはなんか可愛い。

外でしばらく待ってから、俺は声をかけた。

「もう平気か？」

「うん」

答えを待ってから開ける。さすがにおんなじこと繰り返してヒドい目に遭うのは、願い下げだった。

「さっきのすげえ音で、お前が倒れたと思ったんだよ」
「…………ごめん」

着替えてる間に、こいつの頭も冷えたっぽい。

「ホントになんでもねえんだな？ どっかぶつけてねーだろな？
気持ち悪いとかねえよな？」

ぱっと見問題なさげだけど、念のために訊く。

「それは、だいじょうぶ…………ごめん」

「ならいいや、メシ食おうぜ。腹減ったし」

「ご飯って…………ホントに？」

また言われるし。

「ウソ言っただーすんだって、さっきも言っただろ？」
「でも…………」

まだ半信半疑のこいつを、食堂へ連れてく。

「すごい。料理……できるんだ」

「その辺のモン、並べただけだぞ？」

「いったいこいつ、どーゆー食生活してんだか。」

なにせテーブルの上に並んでるのなんざ、残ってた野菜のサラダとスープ、あとはトーストと目玉焼きとベーコンとミルクだけだ。ちなみに叔父さんたちは、夕べ駆り出されたつきりでまだ戻っていない。

「その辺、座れよ」

「うん」

思ってたよりかは元気になってるこいつが、椅子にかけた。

「こんなちゃんとしたご飯……久しぶり」

「お前マジでメチャクチャな生活、してねえか？」

これが「ちゃんと」ってんじゃ、あとは推して知るべしってやつだろう。

まあ戦争してちゃ、しょうがねえんだろうけど……。
半分呆れながら、ともかく俺も座る。

「味付け、わかんねえからほとんどしてねえんだよ。その塩でもなんでも取って、自分で足してくれよな」

「うん、わかった」

ルーフェイアが食べ始める。

やっぱり可愛いよな、こいつ。

金の髪で海色の瞳した、とびつきりの美少女だ。だからメシ食ってても、アンティーク人形が動き出したみてえな雰囲気になる。なのにもめっぽう強くて、けど繊細ですぐ泣いちゃまって、でも平気で炎の中へ飛び込んだり……。

「えつと……なに？」

「へ？ あ」

メシ食うの忘れて見てた。

「あたし……なにか、しちゃった……？」

「してねえしてねえ。」

それよりよ、その、えーと あ、そうそう、おふくるさんから連絡、来てたぜ？」

慌てて話題を変える。

「なんか、けっこーこの近くにいるらしいこと、書いてあった」

「ほんとに？」

「ああ」

ざっとしか見ちゃいねえけど、書いてあったことをこいつに言うてやる。

「じゃあ、父さんも母さんも……無事だったんだ」

「よかったな」

ただでさえ兄貴が死んだってのに、そのうえ「両親も」なんてことにならなくて、なによりってやつだ。

「居場所書いて返信したから、そのうちここ、来るんじゃないかねえか？」

「母さんの性格じゃ、今日中に……来るかも」

言い方からするとこいつの親、そうとうの行動派らしい。

「まあいいや。とにかくメシ、食っちまえよ」
「うん」

今度は俺も食べ始める。

俺の通ってる学院の話だのなんだのしながらメシ食って
に違う話になった。 最後

「お前さ、これからどうすんだ？」

なんでもなこと訊いたかは、分からない。

ルーフェアのほうも、なんてことなしに答えた。

「しばらくは、休めると……思う」

「しばらくって、そのあとはどうすんだよ？」

俺の質問に、ルーフェアのやつが視線を落とす。

海色の瞳から、涙がひとすじこぼれた。

「 やめちまえよ」

俺が言つと、涙がさらにこぼれる。

「やなんだろ？ だったら、やめちまえって」

けど答えの代わりに、ルーフェアが首を振った。

「なんでだよ？」

「だって……」

あとは言葉にならない。ただ泣くだけだ。

「けどお前、ヤなんだろ？ ガツコ行きたいんだろ？

じゃあ、そっ親に言えよ

「……だめ……」

呆れる。

ンなどこ頑固じゃなかったって、構わねえだろうに。

けど何度言っても、こいつは首を縦に振ろうとはしなかった。泣

きながら、「だめ」の一点張りだ。

「お前、頭冷やせよ！

今度はどうにかなったって、次はねえかもしれねえだろ！」

「だって、だって……」

泣きじゃくる。

「やめて……言わないで……」

泣きながらこう言われると、俺も弱い。

「その、だからさ、ともかく親に言ってみろよ。ちゃんと『イヤ』
だって」

「……」

そこへ、呼び鈴の音が響いた。

「お、お客さん……？」

「お客ってなあ」

医者に来るのはお客じゃなくて、患者だ。

もつともそれじゃ、困るだけ。

診てもらいに来る人に「帰れ」っつーのは、ちょい楽しくない。
もっかい呼び鈴が鳴った。

「どなたかいらつしゃいませんー？」

「すみません、いま開けるんで」

慌てて走ってって、ドアを開ける。

「すみません、今ここ医者が……あれ、もしかしてルーフェイアの？」

ドアの外に立ってたのは、大人が二人。男と女だ。んで女の人のほうが、髪とか瞳の色とか顔立ちなんか、ルーフェイアと似てる。これはどう考えたって、こいつの親父さんとおふくろさんだろう。

「じゃあ、あなたが連絡くれたのね？ ルーフェイアは今どこかしら？」

おふくろさん（たぶん）が、俺にいきなり訊いてくる。

それをルーフェイアの声がさえぎった。

「かあさん！ いきなり質問攻めにしたら、だめよ」

「なんか、元気そうね」

「うん」

いつの間にやら涙も拭いちゃって、あの落ち込んだ様子なんざ微塵も感じさせない。

バカかよ。

あれだけ嫌がってたのに、親の前じゃ知らん顔してる。

まあもしかしたら、親子ってのはこゆもんなのかもしれないけど。ただなんせ俺、さっさと親父もおふくろもいなくなっちゃったから、そのあたりはよく知らなかった。

んなこと考えてる間にも、ちゃっっちゃと話は進んでる。

「いまね、朝ご飯……食べさせてもらったの。
その、太刀取ってくる」
ルーフェアのヤツが、ひょいと奥へ引っ込む。
俺も思わず後を追った。

「おい、ホントに行くのか？」

「うん。」

迎えに来てくれたのに、待たせてられないから」

またか、そう思う。

どう見たってこいつの本心は、そんなところには、ない。

「いいかげんにしろよ！ お前、ホントはんなこと思ってねえだろ

「！」

「でも！」

珍しく、ルーフェアの口調が強くなった。

「でも、これはあたしの、あたしの……！」

「だから、頭おかしってんだよっ！」

「だいたい、お前が学校」

「だめっ！ それ言わな」

「あんたたちやめなさいっ！」

もひとつかぶった迫力の声に、思わず二人で黙る。

「まったくもう、いきなりケンカなんて始めて。何考えてるんだか」

「あー、すいません、つい」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

一転して平謝りしだすの、こいつの習性か？

「ごめんなさい、すぐ、行くから……」

それをおふくろさんが、止めた。

「ルーフェア、やつぱりあなた、学校行きたいのね？」

まっすぐ見つめられて、ルーフェアのやつがうつむく。

「どうなの？」

「ごめんなさい！ ほんとは行こうなんて、思っていない……」

必死の表情。

なんでだ？

けど理由はこのときは、分かんなかった。

「どうして言わなかったの？」

「だって、だってあたし、この家に……」

俺に分からねえ話を、母娘が始める。

「たしかにそうね。でもだからって、行ったらいけないなんてこと、ないのよ？」

瞬間、こいつの表情が変わった。

「なんで……？」

何かに裏切られた。そんな顔。

「どうして今ごろ、そんなこと……!」
いつもとは違う涙が、こいつの瞳からこぼれる。

「みんな、だつてみんな、あたしは戦うためにいるって!
だから、だからあたし!」

親二人 特におふくろさん の表情が、曇った。

「どうして、どうして……」

よっぽどのことなんだろう、抗議しつづけるこいつを、おふくろさんが抱きとめる。

何も言わないのに、見てるこっちのほうに辛かった。

こいつの親は最初っから、知ってたんだろう。ただなんか、理由があつて……。

「あのよ さっきも言ったけどさ、学院、来るか?」

なんでそう言ったかは、自分でも分からない。

けどそれが、いちばんいいような気がした。

「お前、俺と同じ年だろ。なのにダチもないなんての、やっばど
うかしてるし。」

あとなんかお前メチャクチャ強ええけど、そーゆーのあそこは平
気だしさ」

話聞いて、おふくろさんが顔を上げる。

「あなたの学校? でも普通のところじゃ……」

「俺んところ、Mesなんで」

おふくろさんが、はっとした表情になる。

「その手があつたわね……ああもう、あたしとしたことが、そんな

ことにさえ気づかないなんて」

なんかやたら傲慢な言い方だけど、この人の場合それが当然に思えるからすごい。

「それならやれるかもしれないわね。普通の学校じゃないぶん、かえって楽かもしれないし」

「……そうだろうな」

初めて親父さんも、口を開いた。

「それに前線は、子供が居る場所じゃない」

「父さんまで、そんなこと言うの？！」

弾かれたみてえに、ルーフェアが振り向く。

「そんなの、そんなのひどい……」

泣きじゃくるこいつの細い身体を、おふくろさんがまた強く抱いた。

「ごめんね。本当は分かってたのよ。」

でも、出来なかった。それにMesなんて思いつかなかった」

驚いた表情でルーフェアのヤツがおふくろさんを見る。

「母さん……？」

辛いすれ違い。

ただ間違いないのは、どちらも相手のことを思ってたってことだ。

「いろいろやったけど、普通のところじゃダメだった。いつもあなたは、あたしたちの想像を超えてて……」
良く似た碧い瞳が、こいつを見返した。

「けど彼の言うとおり、ああいうところならあなたでも大丈夫だと思う」
「う」

「でも……」

まだ困惑するこいつに、両親がうなずいた。

「お前がそうしたいなら、行くといい」
親父さんが答える。

「Mesしたらやっぱりシエラかしら？ あそこの学院長は誰だったかしらね」

おふくろさん、すげー強引。もうカンペキに行かせる気ている。

正直こゆタイプの親から、どうやってこゆ大人しい娘が生まれたんだか、かなり謎だ。

「シエラ学院ならついでに上級傭兵になつとけば、箔もつくから一石二鳥だし。」

そういえばアヴァンシティにもあったわよね」

って、俺が言ってるのってそこじゃなくて……。

まあ部外者にしてみりゃいくつかある学院のどれも、一緒なんだろうけど。

「えーと、アヴァン分校じゃ上級傭兵、なれないですよ？」

「あら、そうなの？」

説明書があるわけじゃないから、一から説明する。

「あれ、本校の生徒だけなんですよ。だから分校にいてなりたいヤツは、わざわざ本校に転校するんです」

「同じ学院なのに、複雑なのねえ」

「俺に言われても」

なんでそうなるかなんぞ、知りやしねえし。

「で、あなたはどこの生徒なの？」

今度はいきなり話が飛んできた。

「あれ、言つてませんでしたっけ？」

「聞いてないわよ」

あつさり切り返される。

けど良く考えてみりゃ、そのとおりだ。このペースに巻き込まれて忘れてたけど、この人と会ったの、ほんのちょい前だし。

「一応、本校ですけど」

「あら、そうなの？ じゃあそこでいいわね」

いいのか？

なんかこの人、あんまりにもテキストっつーか……。

「そこで、つて、あそこ親いると、なかなか入れないですよ？」

「あらま、じゃあ学院長にでも掛け合わなきゃだわね。あそこは学院長誰かしらねえ」

「オーバル学院長ですけど？」

「あら、やあね。オーバルって言ったら彼かしら？ 最近音沙汰ないと思つたら、そんなところでそんなことやってたなんて、まったくあたしに黙つてそんなことして。」

でも彼なら話が早いわね。すぐ連絡入れなきゃ」

会ったわけでもねーのに、うちの学院長を知り合いの誰かだって
決め付けてるし。

てかとつとと話、進めちゃってるし。

ルーフェアのヤツも話に置いてかれて、さすがに抗議する。

「母さん、そんな勝手に　！」

けど、おふくろさんのほうが二枚くらい上手だ。

「あらあなた、行きたくないの？」

「それは……」

「じゃあ決まりね」

マジ、乱暴な人だし。

「でも、でも……」

「なーに躊躇ってるんよ。行きたかったんでしょ？」

頭ごしごし撫でられて、やっとこいつがうなずいた。

それから、訊ねる。

「……父さんと母さんは、それでいいの……？」

Episode : 32

「いいに決まってるでしょ」

おふくろさんは即答。親父さんの方も微笑してうなずく。でもそれに、まだルーフェアのヤツは食い下がった。

「だって……もう、会えないかも……」

重い言葉。

確かにそうだ。戦地を渡り歩く傭兵は、いつ死ぬか分からない。

こいつの、兄貴みたいに。

だけとおふくろさんも親父さんも、そんなこと気にしてなかった。

「いいわよ。あたしたちがあなたが、幸せならいいんだから。

行きたいんでしょ？」

長い沈黙。

そしてルーフェアのヤツが、顔を上げた。

「……行きたい。あたし、行きたいの。

ダメかもしれない。でも、行ってみたい！」

こんな風にコイツが言うの、もしかしたら生まれて初めてじゃねえのか？

なんとなく、そう思った。

おふくろさんが嬉しそうにうなずく。

「決まりね。すぐ入学の手続きしてあげるわ。

ディアス、この子連れてちよっと、その辺散歩でもしてきてく

れない？」

おふくろさんがウインクして、ルーフェイアを親父さんに押し付けた。

二人が外へ出て行く。

それを見送りながらおふくろさん、背中向けたまま今度は俺に話しかける。

「こんなこと初対面の、しかも子供のあなたに、言う事じゃないんだろうけど」

さすがにカチンとくる。

どーせ俺はガキです。

と、ルーフェイアのおふくろさんが笑い出した。

「あらゴメンゴメン、悪気はないのよ。だってあなた、子供なんだから」

「子供ですいませんね」

人の神経、わざと逆撫でしてんのか？

そんな俺に向かって、お腹抱えて笑いながら、おふくろさんが言った。

「ほら、そんなに怒らないの。」

「だいいちね、あたしあの子の親よ？ だもの学校行ってる子なんて、みんなまとめてあたしの子供みたいなもんよ」

まあ確かにそうなんだろうけど、なんか釈然としねーんですが。

もっともこの人、そんなのに構う人じゃないわけで。

と、おふくろさんが不意に哀しい表情になった。

「少しだけ……うちとあの子の事、話すわ」

Episode : 33

Caileana

かなり長く続いてるうちには、ひとつの言い伝えがある。

そしてそれは……あの子と関係があった。

ただの言い伝え。自分でも、そう思うのだけれど。

でもどうしても引っかけた。それも今になって。

あの話には、後日談があると言われてる。

でも、そう言われているだけだった。内容は家に伝えられてる物のどれを見ても、きれいに消されている。

誰が何の意図で消したのかは、分からない。けど徹底してるところから見ても、その内容を伝えなくなかったのは分かる。

それが果たしてあの子を守るものなのか、それとも破滅へ追い込むものなのか、それも分からない。

そんなものをなんで、いま急に気にするのか。自分でも理解できやしない。

なのに……何かがそうすると、頭の奥から告げてた。

だから、この子に言う。

「あの子のこと 頼むわね？」

Imad

「すごい、ここが……シエラ学院？」

船に揺られながら、ルーフェイアのヤツが呆然と見上げた。

行く先の島は濃い緑で覆われて、その間からそびえる尖塔が見える。およそMesっていう先入観とは、かけ離れてるってやつだ。

「けっこう、大っきいだろ？」
「うん」

「なんたって、小さいたって島が丸ごとだ。つか実地訓練用の場所まで入れたら、このチビ群島全部が学校だった。」

俺らあのとアヴァンから海越えてユリアス国入って、そのあと列車に乗り継いで、ケンデイクまで帰ってきた。

そのあとルーフェイアのヤツがいるいる手続きだのあるってことで、シエラのケンデイク分校でちつと足止めくらったけど、今日許可が下りたとこだ。

つか学院長、本気でこいつのおふくろさんの知り合いだったらしい。

ホントなら親アリは審査で何ヶ月とか待たされるし、春までは分校生やるのが決まりだ。なのにこいつよっぼどなのか、速攻って言うっていい速さで、分校飛び越えて本校への入学許可出てたりする。

たぶんあの複雑な事情を話したんだろけど、それが言えるってことは、かなり仲がいいんだろつ。

逆に考えると、最初っからここ来てりゃさっくり入学できたわけで、その意味じゃルーフェイアのヤツはかなり運がない。

まあ、いまさらだけど。

「この本島に、寮と校舎あってさ。実地訓練なんかは別の島でやるんだぜ」

「そうなんだ……」

その間にも船は進んで、船着場に着く。狭い場所に高速艇まで停泊させてるから、間縫って接岸するのが大変だ。

綱が渡されて、船がしっかり繋がれる。

「気をつけるよ、時々落っこちるバカいっから」
「うん……」

揺れる足元を確かめながら、棧橋へと飛び降りる。

切り立った崖の間の、坂道を登ってくと、いつもみてえに視界が開けた。

「きれい……」

ルーフェイアが声をあげる。

石造りなのに微妙な曲線が多い建物と、上手く配置された五つの塔。周りの木とか草花も専門の庭師 半分ボランティアのじつちやんばつちゃん夫妻だ がきつちり手入れしてるから、絵に描いたみたいな調和ぶりだ。

じつさいけっこう評価も高いらしくて、年に何回か、庭の一般解放までされてる。

「……なんか、夢みたい」

ルーフェイアのヤツが立ち止まった。

「でも、夢じゃない……よね？ あたし、ここに行けるんだよね……？」

不安げな表情で、こっちへ振り向く。

「夢なわけねえって。」

おい、頼むからここで泣くんじゃねえぞ。おれが泣かしたと思われるかな」

「だいじよぶ……」

そしてこの後二人は、この学院で十年の歳月を重ねることになる。

Fin

あとがき

最後まで読んで下さって、本当にありがとうございます。
現在第3作「抱えきれぬ想い」を連載中です。リンクを貼っておきますので、読んでいただけたら嬉しいです。なお、毎日“夜7時”過ぎの更新です。
感想・評価大歓迎です。お気軽にどうぞ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6982d/>

憧憬 ルーフェイア・シリーズ02

2009年3月24日11時22分発行